

良心的戦争忌避者と詩人たち

矢口 以人

1. 序

米国に移住した人々の動機は多様だったろう。その中のあるキリスト教徒は徴兵制度を逃れることが大きな理由で移住した。主として再洗礼派の流れをくむ教会の人々やクエーカー教徒、それに兄弟団教会 (Church of the Brethren) の信者たちで、いわゆる歴史的平和教会と呼ばれる教会のメンバーだった。

このキリスト教徒たちは独立戦争にも、南北戦争にも、第一次大戦にも賛成しなかった。彼らはいかなる場合にも、殺すことに反対の立場をとっていた。彼らはいろいろ困難な状況の中で、迫害を受けながら、粘り強く政府と交渉し、良心的兵役忌避者 (conscientious objector、以下 C.O. と略す) の制度を確立していった。

しかしそのような制度が確立されても、米国民の C.O. に対する態度は決して暖かいものではなかった。以下において、第一次大戦と第二次大戦中、C.O. がどう取り扱われ、どう見られていたかを見てみたい。

2. 第一次大戦

第一次大戦は米国史上初めての全国的な徴兵制度の施された時だった。そして平和教会と政府の間に、C.O. に関して次のような了解事項が取り付けられた。即ち、C.O. は召喚されたら、軍に出頭しなければならないこと、そこで兵士たちと隔離されること、軍服を着ることも訓練を受ける必要もないこと、非戦闘員の任務が与えられること、良心的にその任務に服し得ないなら、それを承諾する必要がないこと、いかなる任務にもつけないなら、仮収容所⁽¹⁾に入る事等だった。

しかし現実はこの了解事項とははるかに違っていた。C.O. が軍隊に召

喚されると、軍人たちは全く無理解で、リンチを加えることがよくあった。⁽²⁾ 例えば次の手紙はその虐待を示す証拠物件である。

彼らは、勤務に服するのを拒んだので、下士官や兵卒などから虐待を受けました。彼らの一人が書いた手紙の一部分をここにお見せしましょう。

ヴァージニア州リー・キャンプ、1918年7月16日

「今日わたくしたち数人は、キャンプに来て以来の辛い経験に会いました。罵られ、なぐられ、蹴られ、演習をやり抜くよう強制されたりして、しばらくのあいだ意識不明になった者もありました。ほとんど午後いっぱい、以上のような虐待をうけつづけ、その後、足の立つ者は冷水を押しつけられました。ある人などは、アルカリ液を塗られて洗濯用ブラシでごしごしやられました…」

別の青年の手紙を一部引用しましょう。

「…彼らはわたしをひっぱって行って、処罰とか投獄とかのあらゆる脅迫でわたしをおびえさせようとしてしました。彼らは最後にわたしを縛らせるために営倉付軍曹を呼びました。軍曹はすぐにやって来て、営倉へいく途中棍棒でわたしを撲りました。入牢者たちはわたしをちょうしょうして、軍法会議を真似た裁判をやらかすのでした。綱をわたしの首に巻きつけ、意識を失うまで吊るしておくのです。殺されると観念したわたしを、彼らは下ろして灌水浴に引き立てて行き、十分間ほど冷水を浴びせ、⁽³⁾ そのためわたしはどうしようもないほどに疲れてしまうのでした。」

e. e. カミングスの詩“*I sing of Olaf*”⁽⁴⁾（「私はオラーフを歌う」）はこのような状況を描いたものである。宗教的な理由でC. O. になったオラーフは軍に召喚され、非戦闘員の任務が与えられ、その立場が認められるはずだが、事態はその正反対である。

オラーフをあずかる上官は士官学校出身の大佐で、愛国心を持ち、よく訓練され、軍国主義の教育を受けている。従って、非戦の立場をとるオラーフを「過ちをおかしている」(erring) と思うのである。

この大佐の下にいる士官たち、下士官たち、兵たちが大勢で、無抵抗

のオラーフにリンチを加えるが、オラーフは決して屈せず、国旗に頭を下げようとはしない。

but—though an host of overjoyed
noncoms (first knocking on the head
him) do through icy waters roll
that helplessness which others stroke
with brushes recently employed
anent this muddy toiletbowl,
while kindred intellects evoke
allegiance per blunt instruments—
Olaf (being to all intents
a corpse and wanting any rag
upon what God unto him gave)
responds, without getting annoyed
“I will not kiss you f. ing flag”

しかし一大勢の下士官たちが大喜びで
初めは頭をなぐっていたが、やがてこの
無力な男を氷のような水に入れて
ぐるぐる転がし、ある者たちは
汚れた便器に使われたばかりのブラシで
ごしごしなでつけ、頭の良い連中は
鈍器で痛めつけながら、忠誠を誓えと叫ぶ—
それでも（どう見ても
死体そのものになり 神の与えたものは
何も身につけていない）オラーフは
「薄汚い国旗に誰がキスなどするものか」と
迷うことなく答える。

C. O. は臆病者だとあざけられ、非国民だとののしられた。しかしここに描かれているオラーフは勇敢で、暴力には決してひるまない。殺され

ても殺さない平和主義のキリスト者の面目が躍如としている。次の連でリンチはクライマックスに達する。

but—though all kinds of officers
(a yearning nation's blueeyed pride)
their passive prey did kick and curse
until for wear their clarion
voices and boots were much the worse,
and egged the firstclassprivates on
his rectum wickedly to tease
by means of skilfully applied
bayonets roasted hot with heat—
Olaf (upon what were once knees)
does almost ceaselessly repeat
“there is some s. I will not eat”

しかしこの国の誇りである憧れの青い目の
あらゆる階級の士官たちが
受身の餌食を蹴りあげ、ののしり、
そのかんだかい声と長靴が
傷んでくると、今度は
下の兵たちをそそのかし、
灼熱した銃剣をたくみに
肛門にあてさせて、残酷ないじめにふけらせる—
オラーフは形の崩れたひざで座って
ほとんど絶えることなく繰り返す、
「どうしてもできないものってあるものさ」と

国家が戦うとき、国民は全部軍人になって戦うことが要求される。個人の信念や信仰は許されない。このような考えの中で、C. O. は迫害された。オラーフは牢に入れられて、そこで死ぬ。カミングスはこのようなオラーフこそ真に勇敢な、かけがえのない男であると言う。

カミングスはオラーフを客観的に描いているが、E. S. V. ミレー (Edna St. Vincent Millay) の“Conscientious Objector” (「良心的兵役忌避者」) は自分を C. O. にしたてて、C. O. の気持ちを描こうとした作品である。彼女は戦争する政府 (または国家) を死神 (Death) と言い、その仕事は各地で戦争を起こすことだと第一連で暗示する。

I shall die, but that is all that I shall do for Death.
I hear him leading his horse out of the stall ; I hear
the clatter on the barn-floor.
He is in haste ; he has business in Cuba, business in
the Balkans, many calls to make this morning.

私は死ぬだろう、ただそれだけだ、私が死神に対してすることは、あいつは馬小屋から馬を出している。その床がかたかた音をたてている。

急いでいるのだ。キューバに用事がある、バルカンに仕事がある。今朝はあちこちに寄らなければいけない。

このような戦争屋に対して、C. O. の「私」は殺されても協力しない、というのが次の二つの連である。

Though he flick my shoulders with his whip, I will not tell him
which way the fox ran.
With his hoof on my breast, I will not tell him where the black
boy hides in the swamp.
I shall die, but that is all that I shall do for Death ;
I am not on his pay-roll.

I will not tell him the whereabouts of my friends nor of my
enemies either.

Though he promise me much, I will not map him the route to any
man's door.

Am I a spy in the land of the living, that I should deliver men to
Death?

Brother, the password and plans of our city are safe wish me ;
never through me
Shall you be overcome.

むちで肩をたたかれても、狐がどちらへ走って行ったか教えはしない。
い。

胸に足をおかれても、黒人がどこの沼地に隠れているか教えはしない。
い。

私は死ぬだろう、だけどそれだけだ、私が死神に対してすることは。
あいつから給料はもらっていない。

友人のありかも敵のありかも教えはしない。

たんまりほうびは出すと言うのだが、居場所を教える道路地図は書
かない。

生ける者の国で、人々を死神に渡すスパイには決してならない。

兄弟よ、私たちの町の計画や合言葉は決して漏らさない。

あなたがたをあいつの手に決して渡さない。

ミレーはしいたげられる者や戦争を拒否するものたちの側に身をおき、
戦争する政府を拒否する態度をこの詩で明確にしている。この詩とカミ
ングスの詩は、戦争の悪をあまり疑わない当時の詩壇の中で異色の作品
と言えるだろう。

3. 第二次世界大戦

第一次大戦において、C. O. はひどい迫害を受けたが、第二次大戦で
は、違った措置が取られるようになった。このあたりの事情について、
ガイ・ハーシュバーガーが、

「1940年の徴兵条例が書かれていたとき、軍当局と歴史的平和教会

の代表者たちが集まって協議した結果、今度は戦闘員、非戦闘員を問わず、いかなる兵役にも良心的に参加できない者は、軍隊に召喚されるべきではないということに同意した⁽⁶⁾」

と書いている。

そこから発展してとうとう民間公共奉仕制度 (Civilian Public Service System) が誕生した。リンドは「C. P. S! これは、メノナイト教会では日常茶飯事的な言葉となりました。C. P. S. は、軍隊が世界中を破壊しつつある間に、その反対に世界を建設してゆくという仕事に青年たちが就くその機会を恵むものでありました。1941年5月に、最初のキャンプがヴァージニア州のロットーズで開かれました。1947年に C. P. S. が終わるまでに、約1万2千の人々が、国家的に重要な任務に延べ230万日以上は無償労働をしたのでした。この3分の1以上はメノナイト教会に属する信徒たちでありました。60以上の基地キャンプと奉仕団が、土壤保全や森林業務、国立公園の仕事、土地開発局や、連邦安全保障局の仕事、農業や酪農、精神病院や感化院、公共保険などに関係した業務に貢献しました。メノナイト中央委員会に結びつく各教会は、これらの人々への援助金として300万2268ドル75セントを寄付しました⁽⁷⁾」と書いている。

第二次大戦中に兄弟団の C. P. S. 収容所にいたカトリック系のビート詩人ウィリアム・エバソン (ブラザー・アントナナス) は「第一次大戦時における C. O. に対する残酷な扱いを避けるため (その一端がカミングスの「私はオラフを歌う」に描かれている)、平和教会が介入して⁽⁸⁾」C. P. S. を始めたと説明している。

しかし C. P. S. の制度が打ち立てられても、国民一般の C. O. に対する態度は決して良くはならなかった。C. O. は戦争する国家に従わない非国民であり、臆病者であり、売国奴でさえあった。親しかった隣人が、一瞬のうちに、自分が C. O. ということのために敵に変わってしまう恐怖をスタフォードが『私の心の底で』で描いている。

スタフォードは兄弟団教会のメンバーで、自ら C. O. として戦争中 C. P. S. の収容所で過ごした。その時の体験がこの本におさめられているのだが、第一章にはあやうく市民からリンチを受けそうになった場面が展開されている。

1942年3月のある日曜日、スタフォードはアーカンソーのマクニールという町にいた。「ボブは水彩画をかき、ジョージは手帳に詩をつづり、私は『草の葉』を読んだり、目をあげてあたりの景色を楽しんだりしていた」と先ず書いている。

するとそこに立派な服装をした青年が近づいてきて、ジョージの書いている詩をもぎとる。

“What’ the idea of writing things like this?” he challenged. “If you don’t like the town, you haven’t any right to come around here.” I was familiar with the edge on his voice. He knew we were CO’s.

George stood up, straight, with his arms hanging at his sides, his face composed, and remonstrated that he hadn’t meant the poem to be read—he was just trying to express his own feelings.

“Here,” George said, “I don’t want the poem ; I’ll take it and throw it away.” The young man held the poem away from George’s outstretched hand and took his discovery a few steps away to show it to another townsman. The two muttered. The first man returned. He scrutinized Bob’s drawing, while George and I stood without moving and Bob went on painting—a little faster. What could we do when men were dangerous?⁽⁹⁾

「どうしてこんなものを書いているのか」と彼はいどんだ。「この町が嫌なら、このあたりに来る権利はないんだぜ。」その男の声の鋭さには聞き覚えがあった。僕らがC. O.だと知っていたのだ。

ジョージは腕を両側にたらしただまま立ちあがった。顔は落ち着いていた。詩は人に読んでもらうために書いているのではない—ただ自分の思いを書こうとし、または表現しようとしているのだと言って抗議した。

「ほら。この詩はもういらぬよ。はがして捨てるから。」ジョージの伸ばした手から青年は詩をもぎとり、数歩歩いてその見つけたものをもう一人の町の人に見せた。二人はぶつぶつ言った。最初の

男が戻ってきた。彼はボブの絵を詳しく調べた。ジョージと僕は動かずに立ち、ボブは絵を書き続けた—少し速めに。人々が危険な存在になるとき、僕らにいったい何ができようか。

それから町の人々が彼らを取り囲み「腰ぬけめ」(yellow)とか「けしからん奴だ」(damn)とののしり、「つるしてしまえ」と叫ぶ。

間一髪というところで警察に助け出されて、キャンプに帰り、その体験を皆に分かちあって、笑ったりするのだが、所長が次のように述べる。

“I know you men think the scene was funny, in spite of its danger ; and I suppose there's no harm in having fun out of it ; but don't think that our neighbors here in Arkansas are hick just because they see you as spies and dangerous men. Just remember that our government is spending millions of dollars and hiring the smartest men in the country to devote themselves full time just to make everyone act that way.”⁽¹⁰⁾

「その場面は危険ではあったが、おかしいと思うだろう。それをちゃかしても悪いことではないだろう。だけどこのアーカンソーの隣人たちがあなた方をスパイで、危険人物だと取ったから、まぬけもんだと思ってはいけない。わが国の政府が何百万ドルもの金を使って、この国のすごく頭のいい連中を雇い、国民にあの様に行動するようにもっぱら働かせているのを覚えていて欲しい。」

C. O. を認める法律はできたが、国家も国民も結局は C. O. を危険視し、冷たい態度を取っていることが知らされる。体制にしたがわない C. O. は国の中で、いわば村八分になっている。

カール・シャピロ (Karl Shapiro) は第二次大戦中、太平洋で日本軍と戦ったことがある詩人である。彼はユダヤ系で、ユダヤ人はヨーロッパにおいては本来のユダヤ人にはなり得なかったが、米国においてはなり得る (only in America can the Jew a natural Jew)⁽¹¹⁾ といい、徴兵されれば米国を守るためにそれに応じるといふ。⁽¹²⁾

しかし軍人になって戦争に参加はしたが、それを手放しで賛美する詩は見当たらない。戦争を仕掛ける日本軍に対する憎悪を暗示するものもほとんど見当たらない。感じられるのは戦争に対する虚しさ、懐疑、倦怠であり、戦死したものにのいたみであり、さらに戦争そのもの、戦争するものにの批判である。例えば、「戦死した兵士への悲歌」(“Elegy For A Dead Soldier”)は、兵士の死をいたむだけではなくて、Walshも指摘するように、そこにはこの兵士の生き方に代表されるアメリカ人の生き方に対する批判がある。

だからシャピロが“The Conscientious Objector”(「良心的兵役忌避者」)という詩を書いたのは当然の成行きと言えるかも知れない。この詩で取り上げられているのは刑務所に入れられたC.O.であり、第一連には当時の人々のC.O.に対する態度が暗示されている。

The gates clanged and they walked you into jail
More tense than felons but relieved to find
The hostile world shut out, the flags that dripped
From every mother's windowpane, obscene
The bloodlust sweating from the public heart,
The dog authority slavering at your throat.
A sense of quiet, of pulling down the blind
Possessed you. Punishment you felt was clean.

門ががたんとなって、彼らはあなた方を刑務所の中に歩かせた、
あなた方は重罪犯人以上に緊張していたが、
敵意に満ちた世界、どこの母の窓ガラスからも垂れている旗、
国民の心からにじみでているいやらしい
流血への欲望、あなた方ののどをよだれをたらして狙う
犬の当局—これらが皆締め出されたので、ほっと安心した。
錠戸をおろす静けさの感覚があなた方を
とらえた。罰はさわやかだと感じた。

このC.O.の刑務所を彼は巡礼者であふれるメイフラワー号やノアの

方舟に匹敵すると描写する。彼らは平和を愛し (“These inmates loved only the living doves”), 良い共同体をつくり (“you made/A good community”), いつも祈り (“the men with Bibles prayed”), あらゆる軍隊を否定した (“The opposite of all armies”) と表現する。W. スタッフォードの『心の奥深くで』に描かれている C. O. キャンプでの生活を思い起こさせる。

最後にシャピロは、C. O. は民主主義のため血を流したものとたちと同様に、民主主義の英雄 (“hero”) であると言い、彼らのこのような良心こそが、戦争が終わったとき、米国人の精神のより所になるのだと結ぶ。

You suffered not so physically but knew
Maltreatment, hunger, ennui of the mind.
Well might the soldier kissing the hot beach
Erupting in his face damn all your kind.
Yet you who saved neither yourselves nor us
Are equally with those who shed the blood
The heroes of our cause. Your conscience is
What we come back to in the armistice.

肉体的にはそれほど苦しみはしなかったが
あなた方は虐待、飢え、精神の倦怠を知った。
顔に熱のほとばしる浜辺にキスする兵士が
あなた方を呪うのも無理はない。しかし
自分をも私たちをも救わなかったあなた方は
血を流したものとたちと同様に
大義のための英雄だ。戦いの終わるときに
私たちが帰るのはあなた方の良心だ。

シャピロは結局 C. O. ではなく、正義の戦争を肯定する立場に立ち続けたが、戦争のむなしさを体験し、C. O. を高く評価したのだった。

4. 終わりに

以上において、特に四人の詩人の作品を通して、C. O. が第一次大戦から第二次大戦にかけて、どのように扱われてきたかを見てきた。同時にこの詩人たちのC. O. や戦争に対する態度をも明らかにしたつもりである。

第一次大戦時と較べて、第二次大戦時には、かなりの詩人たちがC. O. だった。目立つところではW. Stafford, Brother Antoninusの他に、K. Rexroth, R. Lowell, A. Hecht, J. Ciardi等と言った詩人たちをあげることができるだろう。そしてベトナム戦争においては、さらに多くの詩人たちがC. O. だったことは言うまでもない。

米国の歴史を見ると、初期においては詩人たちは疑わず、迷わず、政府の命じるところに従って戦争に参加した。米国は神の恵みを特別に受けている国、新しいイスラエル、という信仰にも似た考えにとらわれていたからである。しかし次第に、戦争する国家に疑問を持ち、批判をする文学者が現れた。ウールマンやソローである。

そして20世紀にはいるとある詩人たちの中に、正義の戦争に疑問を持ち、政府が権力を持つて戦争を宣伝し、軍人になることを強要しても、それに従うことを拒否する傾向が明白になり始めている感じがする。

戦争する国家に疑いもなく参加し、それを賛美する愛国主義の詩人たちが大勢いる一方、国家権力に逆らって、己の信ずるところに従って行動し、作品活動を続ける詩人たちもいることを私たちは改めて知らされるのである。

〔注〕

- (1) ミラード・リンド『キリストに従う者と戦争』（在日メノナイト・セントラル・コミティ、日本メノナイト・ミッション）1957年、p. 115
- (2) リンド『同書』p. 115
- (3) リンド『同書』p. 117-118
- (4) e. e. cummings, complete poems volume I, 1913-1935 (MacGibbon & Kee), p. 339
- (5) Edna St. Vincent Millay, Collected Poems (Harper & Brothers

Publishers, N. Y. 1956) p. 305

- (6) The Mennonite Encyclopedia I A—C (The Mennonite Publishing House, Pa., 1969) p. 696
- (7) リンド『同書』 p. 134-135
- (8) David Meltzer (ed.), The San Francisco Poets (Ballantine Books, INC., 1971) p. 79
- (9) William E. Stafford, Down In My Heart (The Brethren Press, Elgin, Illinois, 1971) p. 15-16
- (10) Stafford, Ibid., p. 22
- (11) Karl Shapiro, In Defense of Ignorance (Vintage Books, N. Y., 1965) p. 215
- (12) Shapiro, Ibid., p. 211
- (13) Jeffrey Walsh, American War Literature 1914 to Vietnam (The MacMillan Press LTD, 1982) p. 180
- (14) Karl Shapiro, Poems 1940-1953 (Random House, N. Y. 1953) p. 27